

佛立開導日扇聖人物語 第8回



20th Anniversary
佛立開導日扇聖人ご生誕200年慶

西行庵を追い出された開導聖人は、衣や袈裟を脱いで、普通の町人の姿でご奉公に励まれたんだ。でも、このとき本門法華宗では「三途成不の論争」が起きていたんだね。やがて、それは佛立講を開かれるー開講ーへとつながる大きな事件となるんだ。今回は開講前についてのお話です。

高松左近公

三途成不の論争

讃岐(香川県)を治める高松藩には、藩主(松平頼胤)の兄である松平頼該公という熱心な御題目のご信者がいたんだ。事情があつて三十一歳で高松の宮脇龜阜荘に隠居(家の用事や仕事を辞めて暮らすこと)し、当時の御題目を唱えるお寺が、お葬式とか亡くなった人のご回向ばかり行つて、御題目を弘めて生きていく人々を救うという、仏様の教えを行わないのを見て、自らご信心を弘めていたんだ。今の岡山や徳島、淡路島にもその教えを聞いて、御講席に集まるご信者が大勢いたんだよ。

嘉永三年(一八五〇)、守進と名乗るお坊さんが、左近公が勤める御講席に来て、法論(互いに意見を述べ、どちらが勝れているのか争う)を挑んだ。「悪いことをして、三途(地獄、餓鬼畜生)という悪道(悪い世界)に生まれ落ちてても、子孫やご縁のある人が、ありがたい御題目で申えれば必ず仏になる」と言う守進に対して頼該公は、「御題目で申えば、亡くなった人は、そのご縁によつて人と生まれてご信者になり、そして自ら御題目を唱えて功德を積んでから仏になるのだ。ご回向を



高松左近公と会い、これからの弘通について話し合う開導聖人

したら、そのまま仏になるのではない」と、本当の仏様の教えを伝えただよ。

この法論に破れた守進は、御題目で全てが救われるという説・皆成派の人たちに応援を頼むんだ。また頼該公の、御題目の功德でご信者となり、それから自身の信心で仏になるという久遠派に味方する人たちもいたから、当時の本門法華宗を二つに分ける大事件になってしまったんだね。

開導聖人と頼該公との交わり

安政三年(一八五六)三月、開導聖人は、何とか頼該公を応援しようとして、久遠派の教えが、仏様の正しい教えであることを示した「御法のしるべ」という本を贈られたんだ。その本をご覧になった頼該公は、仏様の正しい教えを伝える方がここにもおられたんだと感激し、その教えを直接聞きたいと、高松に招待され、龜阜荘で出会うことになるんだよ。そして、開導聖人はそのまま

年末まで、毎日のように御講に出て、ご信者さんにも教えを伝えられるんだ。そして、これらのご弘通について色々取り決められ、それが翌年の開講へと続くんた。

松平頼該公

高松藩第八代藩主、松平頼儀公の長男として生まれた頼該公なんだけど、次の藩主は母違いの弟・頼胤公と決まったので、天保九年(一八三八)三十一歳で隠居するんだ。

頼該公は、武術や勉強でも良い成績を修めた人で、また、当時の世の中を良く見ていたので、尊王攘夷(天皇のもとに政治を行い、外国から日本を守ろうとすること)を掲げる人々を密かに助け、時にはかくまったり、お金を渡したりして援助していたんだ。長州(山口県)の久坂現瑞、桂小五郎、高杉晋作、土佐(高知県)の中岡慎太郎など、その保護を受けた人は大勢いたんだ。ところが高松藩は、そもそも徳川將軍家の親戚だから、慶応四年(一八六八)の幕府軍と、幕府を倒して新しい政府を創ろうとした軍隊との間で行われた鳥羽伏見の戦いでは幕府軍になってしまい、賊軍(天皇に逆らった軍隊)となつてしまったんだね。そして、高松には官軍(天皇の軍隊)の兵隊が攻めてくるんだ。

高松では、戦争の準備を進めたんだけど、戦争をすると大勢の人々が苦しむことになるので、頼該公は重い病氣だったけど、藩主の頼胤公を説得し官軍に降伏するんだ。高松を戦争の被害から守つたんだね。でも、無理をしたせいで、その年の八月七日、六十歳で亡くなるんだ。不思議なことに、平成二十九年の開導聖人ご生誕二百年の年は、頼該公の百五十回忌に当たるんだね。



左近公の屋敷跡に設立された香川県で一番古い龜阜小学校



本堯寺(法華宗)にある松平頼該・高松左近公の豊廟(中にお墓がある)



龜阜小学校の校庭にある高松左近公を講る石碑